

昭和六十二年八月二十八日 資料

第九十三回研究発表

古志賀谷氏館跡思考

越谷市郷土研究会

理事 山崎善司

古志賀合氏館跡思考

越谷市郷土研究会

理事 山崎善司

はじめに

越谷に住む人々にとって越谷の歴史を知りたいと思うのは、ごく当り前えの事ではないでしょうか。私共もその一人であります。

私は、ごく子供の頃に、今は「き母にせがんで越ヶ谷の古い話を聞いたものでした。母は当時十五代続いた家で、油長こと山崎長右衛門と云われた家に生れ、父を養子にとり分家した家付き娘でしたので、私の質問にも良く答えてくれました。そうゆう昔語りの中に「昔々越ヶ谷には越ヶ谷太郎と言ふ人が居た」と云う話を聞いた事があつた、唯それだけの話であつたが、昭和四十一年に越谷市郷土研究会に入り、先覚の方々の研究を勉強させて頂いている内に「越ヶ谷太郎」の話は何処にも出てこない事に気がついた、又、誰も知らない事柄でしたし、当時は、文書に無いものは、歴史として認めないと言ふ風潮であつた。

越谷市内に残る、伝承を記録したものに、越谷市教育委員会刊行の「越谷市の史跡と伝説」（昭和三十四年）がある、文化財調査委員会が市内の各学校単位に調査して集録したものである。この中の大相模地区には「大相模次郎能高」の事が載っているが、越ヶ谷地区の項には「越ヶ谷太郎」に付いての記述は、何処にも無いどころか、御殿町に在る建長元年の青石塔婆が在りますが、「大相模氏の建碑か？」と記して在ります。

私は、子供の頃に聞いた「越ヶ谷太郎」の事を思い出して、文献を読みあさり探し求めて、千葉県刊行の房総叢書の中の、千葉大系図（百六拾余家集録）の箕勾系の内に、「古志賀合氏」の名が出て居るのを発見した、昭和四十六年の事である。五十年に越谷市市史が刊行され、「通史一」に記載された事で、「古志賀合太郎」に関する伝承が、正しかった事が立証された事になります。

その後、私は病の為に目を患い、右眼を失い病状好転せず苦しみましたので、研究が進まず十年を空しく過してしまいました。が、小康状態の今心のせかれる俛に、永年の念願である「古志賀合氏館跡」の探究

に着手した訳であります。

幸いな事に、市内神明二丁目に住いの、「桃木源之助」氏が、荻島と神明との境の元荒川で、投網で魚を獲って居た時に、網に板碑が懸かったのがきっかけで、一箇所から三十数個も発見された、同氏の語では「まだ沢山有るが、潜水員があれば取れる」又「此の辺は（川の中）、時々人骨が網に掛かる事がある」と話して居ります。此所で発見された板碑は、文化財保護委員会に通報されたが、余り多数一箇所から発見されたので、誰かが川に捨てた物との解釈で、等閑に附されてしまった。

私は、此の板碑こそが「古志賀谷式一族の滅亡の墳墓」であり、残された越ヶ谷の人々が去々の思いで供養した印の碑であると確信するものであります。越谷市「市史」が編纂された時に、東松山市簡易編纂委員会の縁起書の中に「越谷野に於て合戦し、上杉方勝利す」と云う文章が有りますが、当時の編纂委員会に於ては、此の文の他に越ヶ谷地区で、合戦が有ったと言う歴史的事実が無いとの理由で不採用と致った経緯が有ります。

「古志賀谷太郎・同一郎・同四郎」の「館跡思考」とした事に付いては、越谷市の歴史に対する考え方からすると、「文書の無いものは歴史では無い」と一笑に附される事柄に属すからであります。

近年「古志賀谷太郎の館跡」が河川の改修に依り破壊される事になり、又その所有者に依り残地の全域がマンションの建設予定地と成る事が言われて居ります。この地は又、越ヶ谷御殿跡地でもあります。

文化都市の宣言をした越谷市が、貴重な越谷市の文化遺産である、中世の騎士「野与党の氏族である古志賀谷氏館跡」を、自らの手で破壊し滅失する様な事の無い様念願して、此の一文を世に捧げる者であります。

第一章 土口土心賀公台氏館跡

1、地勢

越谷市の中央、旧越ヶ谷町と大沢町との間を流れている元荒川は、江戸初期までは荒川の本流であったが新河道の掘り替えにより、熊谷市南部にて閉め切られて、入間川に流れ為に水量が低下したので、「蛇行」する流路の直線化を計り、多くの美田が開発された。この川が中世末期までは武総の国境を成していた。つまり武蔵国騎西郡と下総国下河辺庄（新方庄も含む）であります。

越谷市は、この国境を中央に挟んで包含して構成されています。ちなみに元荒川の東岸は下総国で、産土神は香取神社を祭祀する村々であり、西岸の地武蔵国騎西郡は久伊豆神社を産土神とする村々である。

2、古代

さてこの地域の開発は何時の時代かは、即答は出来ないが、弥生時代までは逆上る事が出来る。

この地域は利根川・荒川が共に大曲流をしている為に、毎年の如くに水害に見舞われていたから、遺跡は破損壊滅されて痕跡程度になってしまっているので、開発の時代を証拠立てるものは稀薄である。

しかし、時代が下り、条理制度が施行された当時の様子は、八潮市の八条、越谷市の四条・千疋・南百（納戸）・別府等々の地名などにより考察する事が出来るし、見田方も「御田方」の事で、その頃の遺名であると想定出来る。

幸いな事に見田方には、須恵器・土師器を含む「見田方遺跡」が水田下80センチ程より発見され、先年その発掘が成された。

条理制度が施行されたと言う事は、その土地がそれより以前から、人々が生活して居ったと言う証拠であ

る。条理制度とは人々の生活に網を被せて年貢を取り立てる仕組みであるからである。

これ等の古代の人々が、越谷近郷の開発者であると云える。

3、平安より吉野朝期迄

平安中期より鎌倉初期にかけて武士団の発生と、勃興により郡、郡司の勢力は強大なものとなった。

古利根川沿岸には秀郷流藤原氏の末裔下河辺氏・大河戸氏・清久氏・高柳氏や・紀ノ氏流の春日部氏等が席捲して播擧し。

綾瀬川と元荒川に沿った地の騎西郡には、桓武平氏千葉氏流で武蔵七党の一つ、野与党を称する、菅間・多名・多賀谷・道智・鬼窪・南鬼窪・白岡・黒浜・佐那賀谷・江ヶ崎・金重・渋江・箕勾・神倉・怕崎・横根・須久毛・古志賀谷・大相模・八条の諸氏が、それぞれ入植した地の地名を名字に冠して、騎西郡に点在し開発人となった。

関東を制した源頼朝は、平家が天下を領していた時に押領されていた越谷近郷の地、つまり大河戸御厨領

を豊受大明神に寄進した。

資料一 吾妻鑑

寄せ奉る御厨領、合一処、武蔵国騎西、足立

両郡内に在る、大河戸御厨は、右件の地、

元桓伝の家領なり、

而して平家天下を領虜の頃、押領する所也

而して今新たに、公私御祈祷の為、豊受大神

宮御領に寄せ奉る。

長日御幣毎年臨時祭等勤仕せしむ所也。

権神主光親に仰せしめ、天下太平の祈讀の処、

感応あるにより、殊に祈祷所として知行せし

む所也。但し、地頭等に於ては、相違ある

べからず、よつて後代の為

件の如し、以て解す。

寿永三年正月 日

前右兵衛尉源朝臣

寿永三年（一一八四）頼朝は大河戸御厨領の内、

武蔵騎西・足立二郡内の領地を神領として寄進したが

、地頭等はそのまま安堵するとしている。

この時代の越谷周辺は第二次開発者、つまり前出諸氏の開発が功を成したのである。

建久三年（一一九二）七月二十八日には

資料 2、 吾妻鑑

伊勢大神宮御領、武蔵国大河戸御厨所濟の事員数を増し神主に対し定め下さる。

当所田代八百余町なり、平家知行の時、

本宮に御上分、国糶百十三疋の外、神用に能ずといえども、此の御時に当り公私御祈禱の

為正官物並に免じ奉る所也。

所謂本田町別二疋四文、新田町別一石、所当

田町別一石斗云々、

因幡前司、藤民部これを奉行云々。

この頃大河戸御厨の規模は八百余町であった事が判り、平家治政の頃は、本宮上分に国糶百十三疋だけであつたが、

この時より町別一疋四文、新田は町別一石、所当田は一石三斗と定め、奉行人には大江広元等が命じられ

ている。

この様にこの地域が、下河辺一族や野与党による開発が進んだものと、推量される。

越谷辺はどうであつたらうか、

越谷周辺には、大相模・八条・須久毛・柏崎・渋江等が見えるが、その中で野与党の渋江氏が頭梁として見える。

これら野与党の中で、地頭職に補任されていた、渋江光衡（平）の状況を参考に附すと。

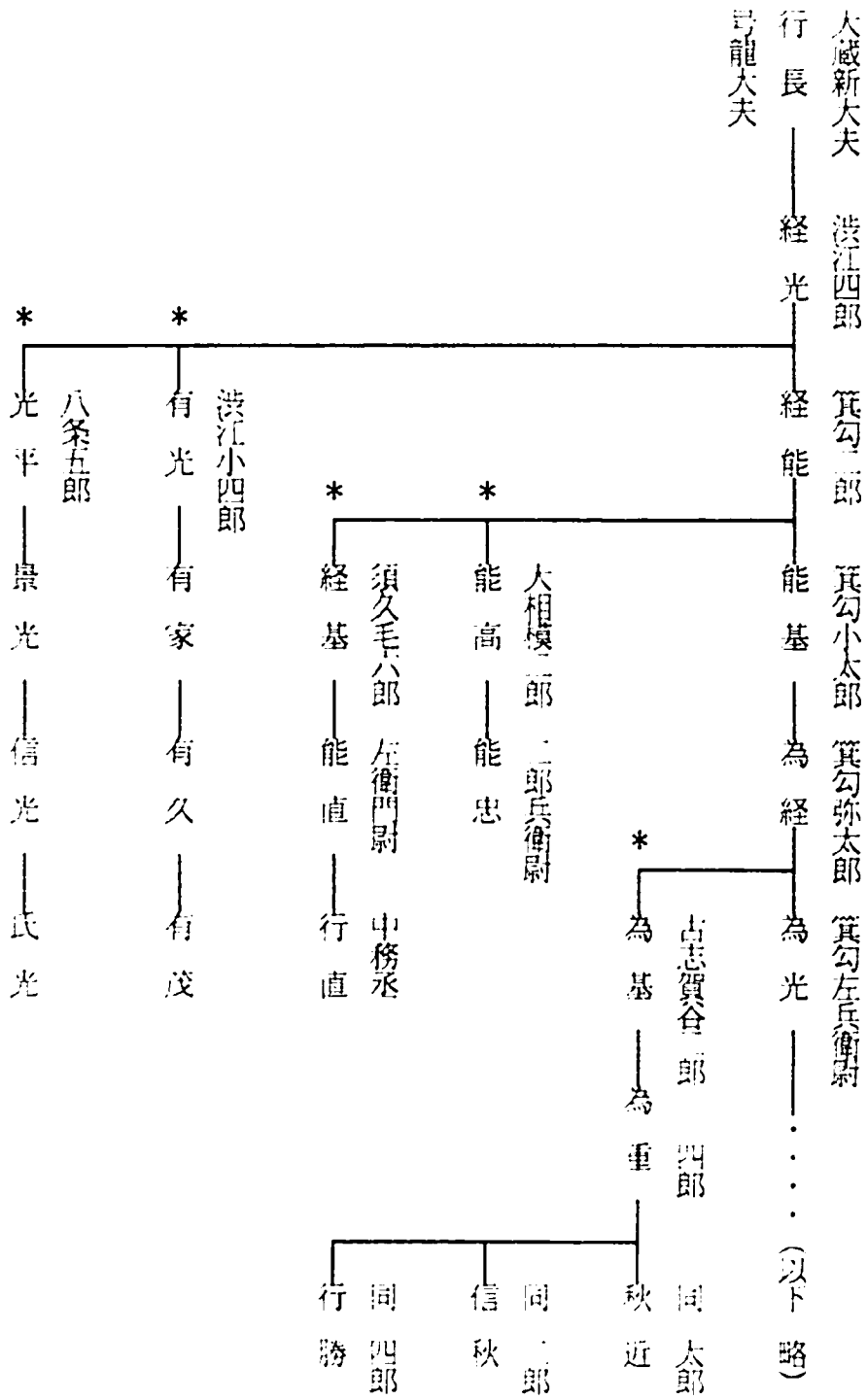
建暦三年五月（一一二二）十七日の記録では次の如く述べている。

資料 3、 吾妻鑑

先の次郎左衛門政宜の所領、武蔵国大河戸御厨内の八条郷を色部大夫重清に賜ふ。

但し、地頭渋江五郎光衡は本所の如く安堵すべきの由仰せ下さる所也。

相州、前大膳大夫下知加えらる云々。



八条郷は次郎左衛門尉政直より式部大夫重清に所領替となるが、地頭は渋江氏の本所の如くとしている。

既に八条光衡が地頭職で、八条郷が本所であり、この辺まで渋江氏の勢力圏であった事が判る。

何故この辺鄙な郷村の記録が残存したかを考察する

と、この日より半月前の五月二日、和田義盛一族の倒幕事件が発覚し、反乱は鎮圧され和田一族はちゅう伐された事件があった。

この時に政宣が関与したかどうかは、不明だが所領は収公され、替って重清に下賜されたものと推定出来るのである。

渋江光衡（平）は平安末期より鎌倉初期に生存（一一七〇〜一二三〇）した人物と推量出来る。

この野与党各氏の中に、箕勾氏より出たる「古志賀谷氏」が見えてくる。

第二章 古志賀谷氏について

1、古志賀谷氏の出目

右系図の如く、「古志賀谷氏」が「為基」を初祖として見え、名字に越ヶ谷郷名を冠している。

この為基が、開発名主か地頭であったかは定かでは無いが、八条・大相模氏等と共に、渋江一族の勢力が南進している事は事実で、各郷の指導者であった事が想定出来る。

この「為基」の生存年代を推定するには、千葉大系図と、前出八条光衡の事項と、越ヶ谷御殿町にある建長元年（一二四九）の板碑が重要であろう。

この板碑は岩槻市笹久保須久毛善念寺跡の、寛元元年（一二四三）記板碑に次ぐ南崎・北畠中最古の板碑で、この板碑が「古志賀谷一郎為基」の建碑とするのは早計ではあるが、

右の系図から判断すると大体寛喜弘安（一二三〇〜八七）の時代に生存した人物と推量出来る。

建長板碑に次ぐ御殿町には貞和三年（一二四七）や寛正六年（一四六五）も同所に所在し「古志賀谷氏」生活の痕跡を知る資料である。

その他、御殿町以外で発見された板碑は、久伊豆神社の嘉暦元年（一二三六）と、「瓜の蔓」に記載され

ているが、所在不明の建武二年（一一三三—五）がある、何れも建長板碑のある御殿町とは隣接地である。

3、新町の八幡神社

文和二年の板碑を御神体としている。

鎌倉時代の御家人が八幡信仰を多くした様に「古志賀谷氏」も、八幡社を勧請したものと推量出来るが、文和二年（一一三三—五）の板碑を以て勧請年とするのは当たらない。「文和」年記は北朝年号であるので、古志賀谷氏は当時、野与党一族が足利氏方であったと同様に、北朝方であった事が判かる。

2、久伊豆神社

次に吉野朝期に至る迄、開山勧請の寺社について考証したい。

参考資料 5、吾妻鑑

建久五年（一一九四）六月三十日、武蔵国大

河戸御厨に於久伊豆宮の神人等、嗔嘩し訴え

の由、その聞えあり、驚き思食さる。

依って尋ね沙汰せしむる為、掃部允行光を遣

し下さる、云々。

4、神明神社

神明下・神明下耕地（現神明町一・二丁目）と云う地名が、元荒川に沿って細長く在り、当時の宮の規模を推測させる地名である、現在は神明町二丁目浦和県道端に移築されている。元の地は、「神明橋の下で出津になつていた所に在ったが橋が出来るに付き移転した、倍近い建坪で有った」と、又、「昔の神明宮は、五里四方には無い程に立派な物であった」と、古老が言伝えている。

その勧請は、鎌倉期より以前と考えられる。

騎西郡の産土神久伊豆神社の創建は、村落の成立と共に成るものであるから、その創立は寺院より古く、鎌倉時代の勧請とするのは無理な推定であるが、この資料により、古くから既に存在していた事が判る。

5、市神社

越ヶ谷本町三に所在、嘉吉二年（一四四二）の年記が棟札に記されている。（新編武蔵風土記稿）

6、天岳寺

至登山天岳寺は浄土宗、太田道灌の叔父「源昭」を開山僧とし、文明四年（一四七二）太田下野守の開基と記されている。

中古他領を侵略し、その地侍、土民層を掌握する手段として、神社・仏閣の修復が多く成されている。

7、澄海寺

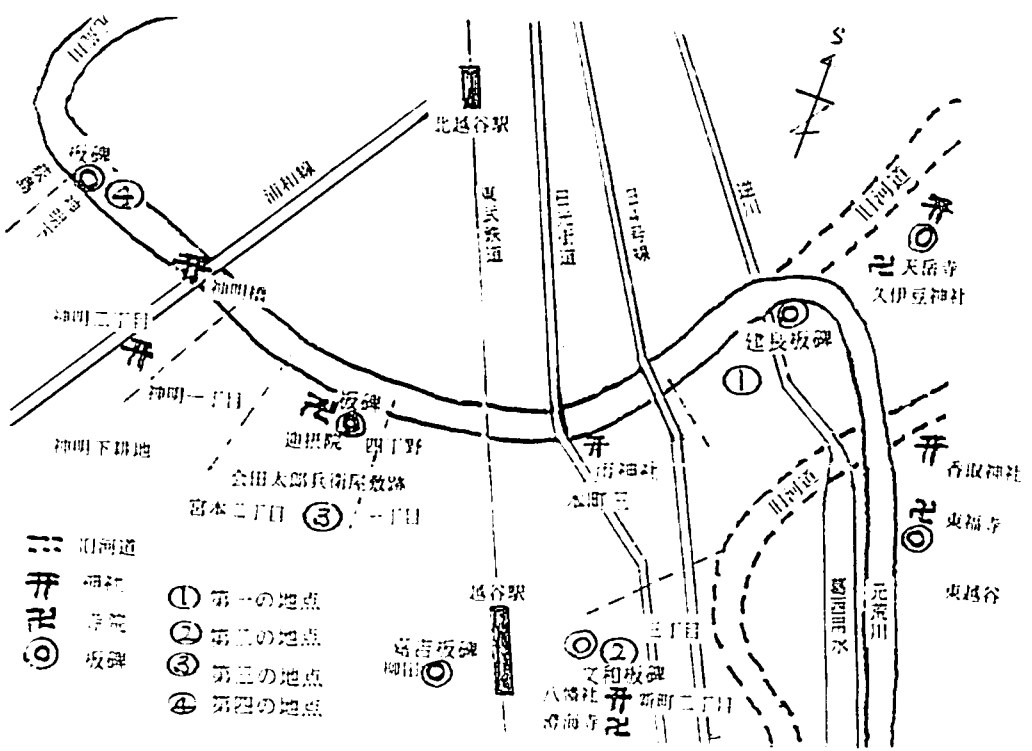
新町二丁目八幡神社の隣に在ったが、今は廃寺となり、空地と成っている。修験道の寺としている。

8、迎撰院

四丁野（現宮本町二）、真言宗、天文四年（一五三三）中興開基としている。

同所竜王堂は文禄元年（一五九二）、同弘誓寺は文禄三年（一五九四）に中興開山されている。共に今は廃寺となっている。

板碑発見場所の略図



第三章 古志賀谷氏館跡は何処に

これに続く耕作可能な畑地が成立する。

1、 中世武士の拠点

2、 第一の地点

先ず「古志賀谷氏」が、越ヶ谷の何処のあたりに居住したのだろうか。

御殿跡を第一の地点として挙げたい。こうして出来た河川沿いの後衛地と「土樋」地は屋

埼玉東部地区の板碑は、概して自然堤防状の微高地か、その周辺の田畑中の小墳に存在している。

館を構え、北側が河川で防御に適し、南が開けて耕作に適し生活しやすい地である。

建長・建武・嘉暦・貞和・文和等鎌倉より吉野朝期までの間の板碑は、越ヶ谷本郷と比定出来る地以外からは発見例を見ない。

この地の後方には産王袖が空して居り、天岳寺が隣接地にあり、この「御殿跡」に居館を構えるのが最適地であった事であろう。

即ち、自然堤防状の微高地であると共に、越ヶ谷で最も地盤の高い御殿跡と、その周辺での類似の地点に限られている。

その東北端から建長板碑が発見されている。又、同所からは、貞和三年（一三四七）・寛正六年（一四六五）も発見されているので、この地が「古志賀谷氏」の居館跡と推定出来、それ等の生活の痕跡を見る事が出来る。

前図の如く、神明町より流路が東北に向かい、その先が大きく曲流している。この蛇行によって、上流よりの流出土砂は必然的に迎撰院・御殿跡・天岳寺・久伊豆神社にかけての河道に沈堆する。

3、 第二の地点

特に大雨の後等には多量に堆積する、これが冬期の偏西風によって自然堤防上に吹き上げられる。

新町二・三丁目南町並へ、八幡神社と登海寺跡のある地を、第二の地点として挙げたい。

水の年月により自然嵩上げ状況が続き、微高地と、

第一の地点と地続きで、元気が花田地区まで一貫折

して来て、突き当たって右折した所、つまり新町二・三丁目三の日光街道南側(南町並)の地に、八幡神社・澄海寺跡があり、この神社には文和二年(一二三三)の板碑が所蔵され、この地を取り囲む構え堀の遺溝も見る事が出来、「古志賀谷氏」の二郎か四郎かは定かでは無いが、その生活の痕跡を見る事が出来る。

六、 第二の地点

第三の拠点としては、今は川の中と成ってしまった神明神社と、四丁野(現宮本町二丁目)迎瀬院と、その隣接地に在る会田太郎兵衛屋敷跡を挙げたい。

取り水口や構え堀の遺溝を見、迎瀬院には応仁元年(一四六七)・文明十七年(一四八五)・永祿七年(一五六四)・他が所蔵、又、最近墓地の改装の際に、享祿二年(一五二九)・他の板碑も発見されている。

又、四丁野の隣に神明下・神明下耕地と言う地名が残る。

ここには往時「五里四方には、これより立派な神社は無い」と言われた程の立派な神社があったが、元荒川の流路が変り次第に、その敷地が流れに削られて、

今は平らな所が少なくなり、

神明神社の境内の所々に、翁神像の土座があり、神明宮があったか今は南町内、浦和県道沿に移転となり、その痕跡をのみ止めて居る。

この神明神社と迎瀬院との距離が九三米あるが、神明下村の立地を考える時、天岳寺と久伊豆神社の参道(八二二)と同じ様に入口が並んで居り、長い参道の奥に神明宮が坐して居たものと考えられる。

尚、迎瀬院は越谷山神明寺と言う寺号を持ち、往時の神明宮との関係を物語る寺号である。

この迎瀬院と会田太郎兵衛屋敷跡を含めたる地域が「古志賀谷氏」の二郎か四郎かは定かでは無いが、どちらかの屋敷跡と思われるである。

第四章 永享の乱と結城合戦

1、永享の乱

吉野朝期より室町時代に至る武蔵国守護は、一色・足利・高・二本・畠山・上杉の各氏に涉つており、室町時代には、上杉氏の管領職就任により、以後その大半が上杉氏の領有下にあつた。

永享十一年（一四三九）関東公方足利持氏を滅亡させた上杉氏は、武蔵領有を確固たるものにした。

当時上杉氏の一族、扇谷上杉氏は、江戸・川越・足立・騎西に所領を有していた。

2、結城の合戦

永享十二年（一四四〇）七月、持氏の家臣、下総幸手の「二色氏」が北一発を催して村岡河原（熊谷市）にて上杉と合戦したが破れ、結城城に逃がれる。

結城氏朝は持氏の遠見春王丸・安王丸・永寿王丸の三児を、日光に難を避けていたものを、結城城に迎え入れて、籠り、結城合戦が始まる。

その後一年間、十万の大軍に包囲されながら長く戦つたが、遂に春王丸と三人の遠見が、城脱出の際に捕えられ、京に送られる途次に切られたが、永寿王丸は幼児の為に辛くも一命を預けられた。

氏朝は自害して落城、かくて結城合戦は終る。

世の中が一応平和となるが、戦いに破れた者の家族の苦惱を物語る、悲しい話が市内大松の清浄院縁起書、「清浄院由緒著聞書」に、この辺の事情が窺える記述が残されている。

@ この合戦の翌年、嘉吉二年（一四四二）の板碑が柳田（現赤山町六丁目）の忌田の小塚に在つたが、今は無いと、新編武蔵風土記稿に記載されている。

* 伝承では、「昔、ここで合戦があり、多数の死者を葬つた所」と云われている。

@ 又、越ヶ谷本町三の市神社の棟札に、嘉吉二年を見る事が出来る。（新編武蔵風土記稿）

* 市場に関する神社が建てられた事は、結城合戦の後、世の中が治まり、生産が上り交易の爲の市が盛んになった事の証拠である。

これにより越谷市の東半分(下巻園)は桂城方で、

西半分(武蔵園)でも又、台戦があり、騒然となり混乱したであろう事が窺える資料である。

3、古河公方成氏

永享の乱後十五年、辛くも命を預けられた、永寿王丸は成人して京都に在った時、一方鎌倉は荒れ果てた筈であった。

主無き鎌倉では、將軍家に成人した成氏を鎌倉の主として、迎え度いと願ひ出た。許されて鎌倉に帰った成氏は、鎌倉公方となる。

やがて、足利成氏と上杉氏とは確執が絶えず。

康正元年(一四三三)事敗れて、鎌倉を追われ、下総国古河に退き築城して構える。

これ以後古河公方と称す。これに対して山内上

杉氏は、太田道灌に江戸を、川越を上杉持朝に、最前线拠点の岩槻は、太田道貞に、それぞれ修築城を命じて、これに対峙した。

足利成氏の古河動座によつて武蔵の国境近い、「越谷陣」は急に騒然なり、平和な鄉村は一変して戦場となしたのかも知れない。

吉野朝期より室町時代になる。

発見例が多くなる。同時代記の板碑の

③今は無いが柳田(現赤土六丁目)の志田の小塚に嘉吉二年(一四三二)の板碑があった。

④本町三の市神社の棟札に寛正三年記が残されている。(新編武蔵風土記稿)

⑤御殿町に寛正六年(一四三六)が所在する。

⑥四丁野(現宮本町二)迎接院には、応仁元年(一四六六)・文明十七年(一四八五)・永祿七年(一五六六)が所在し、最近墓地より

享祿二年(一五三〇)・他が発見された。

⑦神明町と萩島地区との境、元荒川の河床より発見されたものに、康正三年(一四三三)を上眼

として寛正二年・四年・七年(一四三六・一四三八・一四四一)・応仁元年・三(一四六六・六九)・文明三年・五年・七年・九年・十一年・十二年・十三年・

(一四三二・三六)・明應八年(一四九九)に至る板碑が数十枚連続と目上せられ、尚、未だ

水中に残止ある模様である。

岩槻築城の康正二年（一四五七）より、足利成氏退治が始まる。

越谷市内神明下の元荒川の河床より発見された、康正三年を上限として、寛正・応仁・文明・明応八年迄四十数年間に渡るおびただしき供養の板碑は、只単に偶然と言えるであろうか、何かその辺の事情と関係あるものと考えられないだろうか？

当時「古志賀谷氏」の末裔も当然この地に居住して居たろうし、この上杉勢太田氏の進出に抵抗なく隷属したであろうか？

これらの事を川の中から発見された板碑は何も語らないが、その辺の歴史を物語る唯一の資料であると思はれるのである。

参考資料 6、 箭弓権何神社縁起書

寛正二年（一四六二）九月、足利成氏と上杉方と越谷野に於て合戦、上杉方勝利す。

*越ヶ谷市市史編纂の際に、この合戦の記述は他

の文献には何処にも見当ぬ為に、不採用となつた資料である。

5、 板碑は何を語るか

その後、元荒川の川州より出土したおびたしい板碑が、初めに「誰かが川に捨てた物」と判断してしまつた為に、永く等閑視されてしまつたが、この記述を裏付ける唯一の重要な資料となる板碑である。

*この板碑は発見当初、「誰かが川に捨てた物」として取り扱われた為には、永く市の資料館に埃にまみれていたものである。

*板碑発見場所は、神明と萩島の村境で元荒川の川州であるが、川が急に曲流している場所で、一番流れの強い所であるが、何故かそこだけが浅い川州になっていて不自然な場所であるので、「誰かが川に捨てたのだろう」と言われても、無理からぬ場所である。

この板碑の発見者、神明町「丁目235」桃木源

之助「氏は、当時の事を次の如く語っている。

* 『投網で魚取りをしている時に、板碑が網に懸

かった、引上げて見ると後から後から沢山出て来るので、迎攝院に届けた。

川に潜ればまだまだ沢山有る』と言う。

又、『その辺では、時々人骨らしき物が懸かる時があり、足の骨と分かる物もあった』と言う。

第五章 「古志賀谷氏」の終焉

1、古志賀谷氏の台頭

以上の事柄から、平安時代末より鎌倉時代初期にかけて活躍した、野与党の一族として越ヶ谷に分派し、開発播種した「古志賀谷氏」は、その歴史上にはその存在すら残して居ない俵に消滅して行った。

イ、系図上から、

幸な事に、房総叢書の中にある千葉大系図に「古志賀谷氏」の名が出て来るのである。

然し乍らその事績や終焉に付いての記述は何処にも

見当たらない。

系図上にその名が出て居る以上、文書には無くても何処かに、居住して居った筈である。そしてその存在した痕跡は、何かの形ちで残されて居る筈である。

中世の中級武士の居住地に付いては、その規模や構造に付いては明確に表示出来ないが、前記推定の三か所は、中世武士の居住地として、共通の立地条件を持つている。

即ち、神社と寺を館の隣接地に持ち、日常の信仰を以て人心の掌握と、いざ合戦の場合兵員の籠れる宿舎とも、なり得る場所を持つて居る。

ロ、地形から

館の防御の時の為、一方を河川や崖で、守り易く、館の回りには、防御の為の構え堀と、その取り水口を見る事が出来、屋敷内には多くの竹木を持つている。

これ等の地の後背には、農耕に適し、生産性の高い肥沃な広野が開け、食糧が豊富、生活し易い、これ等は中級武士の館では、必須条件である。

八、板碑から

関東における中世の武士の拠点には必ず板碑が残る様に、古志賀谷氏も痕跡として板碑を残している。

2、居館跡の拠点

イ、第一の拠点は、

以上の事柄を加味し考察し、「古志賀谷氏」館跡を推測すると、太郎・二郎・四郎の何れかは、定かでは無いが、次の如くに成る。

第一の拠点としては、越ヶ谷御殿跡を上げ度い。

久伊豆神社と天岳寺があり、その付近から、鎌倉期

・吉野朝期の板碑を見る事が出来、一方が川で、その後背地が開け、館として絶好の立地である。

ロ、第二の拠点は、

新町二・三丁目南側である。八幡神社と澄海寺跡が確認出来、文和二年の板碑を残し、構え堀・取り水口を備えている。

*澄海寺の存在は、今は廃寺となっているが、

新編武蔵風土記稿や越ヶ谷瓜の蔓に記載されている。

ハ、第三の拠点は、

四丁野（現宮本町二）迎徳院と神明宮跡（現元荒川河床）会田太郎兵衛屋敷跡を含む地域である。

神明神社と、越谷山神宮寺迎徳院とがあり、寺院境内の各所から板碑が発見され、構え堀と取り水口が見られ、一方が川で、後背地も広く館としての立地を備えている。

*神明宮の存在は、今は人々に忘れられてしま

ったが、神宮寺の寺名と神明下と云う地名と、小さくなった今の神明神社に痕跡を残している。

「古志賀谷氏」の存在したと云う事実は、以上の理由で埋解出来た事と思う。

3. 「古志賀谷氏の滅亡」

「古志賀谷氏」が、鎌倉初期から室町期迄、約二百年間も越ヶ谷の地に播種し、何時・何故、この地から消滅したのだろうか？

この問題に付いては、古文書や歴史的な記述等の、何処にも資料が見当たらないので、一度も解明された事が無い問題である。

「古志賀谷氏」の消滅の時期に付いては、その資料の稀薄な為に論議に成らない事も確かである。

然し乍ら、前記の如くに中世武士の拠点を列挙し、その一致点を見る時、その存在が明確に浮び上がり、推定する事が出来る筈である。

さすれば、今はその存在すら知る人も無き「古志賀谷氏」の滅亡時の真相も、その痕跡を辿る事により、浮上させ解明する事が出来るのでは無いでせうか。

以上の如き仮説を立てて、「古志賀谷氏」に關係のありそうな資料を列挙して見た訳である。

4. 「滅亡」の地は

結論的に見て、「古志賀谷氏」の終焉の地は、神明町と萩島地区との境で、今は元荒川の中の川州となつてしまつた所であると思定する。

恐らくは、「かつては合戦塚が在つて、その塚に戦死者の仕養の爲の石の卒塔婆が上げられて居た。

その塚が今は川の中となり、塚の土は川の流れに削られ、板碑は重いので、その場に残り網に懸かつて曳上げられたのが、この板碑である」と推測出来ないだろうか？

ロ、滅亡の時期は、

滅亡の時期は、「寛正二年九月、越谷野に於ける合戦で敗北した時」と言う事になる。

*小田原北条記では六月となつてゐる。

これ又、資料が稀薄であり、然とは断定出来ないが河床から発見の板碑の年記の上隈から見て、康正二年と言う事になるが、東松山市の笛弓稲荷の縁起書の『越谷野に於て合戦』の記述を取るならば、寛正二年（一四六一）九月か六月が終焉の時期と見るのが正しいのではないかと推測出来る。

「古志賀谷氏」の滅亡の時期と思はれる、康正寛正年間に於ける事件を列挙して考察すると。

@岩槻築城の康正三年（一四五七）より、足利成氏退治が始まる。

@同年四月洪川義鏡を武蔵国司として麩に下向させ、上武相の諸將に下知して、『成氏を討取り、上杉氏を 関東管領となし、関東を治むべし』との御教書が発せられる。

@同九月長祿と改元、（一四五七）

@長祿元年十二月將軍の弟政智を還俗させ、伊豆堀越に下向さす。堀越公方と称される。

@長祿三年十月、上杉勢大田庄に乱入、久米原須賀・小野袋にて合戦・上杉教房討死、上杉勢・成氏方一色氏の城高野城を攻める。

@寛正二年八月、上杉房頭に二万余騎の軍勢に對する古河公方軍は八千で戦い、双方多数の死者を出し公方軍は敗れて古河に逃げ帰る。

@寛正二年（一四六一）九月、成氏と越谷野に於て戦う、上杉方勝利。（同一の合戦か？）

@同十月、上杉勢、俄に高野の浅間台城を急襲

以上当時の事件を列挙して見ると、ほぼ寛正二年八月か九月の越谷野に於ける戦により「古志賀谷氏」が滅亡したものと推定する事が出来るのである。

「古志賀谷氏」の終焉の地と思はれる地より、多数の板碑が発見された事は、板碑は何も語らないが、一族の怨念がそうさせたのではなからうか。

ともあれ、鎌倉初期に野与党の一族として、越ヶ谷の地に興り、播磨した古志賀谷氏は、時代の流れの能取を誤らずに、良く中世の変転極まり無き世を、生き抜いて来たが、上杉氏と成氏との確執の渦に巻き込まれ、遂に、扇谷上杉の家臣、太田道灌に攻められ滅亡し、この世から消滅してしまつたのでは無いでしょうか。

今、「越ヶ谷氏」を名乗る家は関東に十指に余る程度にて、一様に先祖の地は結城と言ふ。

結城市の孝頭寺に、「越ヶ谷氏」名の墓を見るが、この一族が「古志賀谷氏」の末裔であるか否かは今の所不明である。

社和 び に

既刊の拙著、「越谷会田氏と越谷御殿の研究」や会報2号古志賀谷の「古志賀谷氏について」、を見直し、新たな資料を加え、又不採用の資料などを再検討し、現地を歩き見聞し思考し、八百年前の地形や時代考証などを合せて、真実の史実を解明する事を念願として、この稿を起こしましたが、今一つ資料不足と勉強不足と生来の浅学愚鈍の為に、明確さを欠き、今一步の追求にもどかしさを感じ、研究不足を露呈する結果と成ってしまいました事を、深くお詫び申し上げます。

終りに、今回の取材に当たり、御殿町の会田喜一郎氏・新町二丁目八幡神社脇の辻 甲一氏・同二丁目会田 圭氏、中町箕輪桑三郎氏、宮本二丁目迎徳院住職の塚田有祥氏・神明二丁目の桃木源之助氏・郷土研究会の小島 誠氏・木村信次氏に御協力御助言等沢山頂き誠に有難く、誌上を以て厚く御礼申し上げます。

昭和六十三年八月 一日

越谷市郷土研究会

理事 山崎 善司

参 考 資 料

吾妻鑑

群書類縦

新編武蔵風土記稿

小田原秘鑑

房総叢書

越ヶ谷瓜の蔓

越谷市市史

越谷金石資料集

越谷の史跡と伝説

越谷会田氏と越谷御殿

古志賀谷氏について

北越谷の歴史

拙著

”

”

発行日 昭和六十二年六月 一日

越谷市郷土研究会会員

著者 山 崎 善 司

発行者 越谷市弥生町一の九

山 崎 善 司

TEL 6213733

発行所 越谷市弥生町一の九

山 崎 企画工房

TEL 6213733